

會館の時代

中之島に華開いたモダニズムとその後



會館の時代

中之島に華開いたモダニズムとその後

会期：2015年3月7日（土）～4月5日（日）、毎週火曜日休館

会場：153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 東京大学駒場博物館

Tel: 03-5454-6139 Fax: 03-5454-4929 HP: <http://museum.c.u-tokyo.ac.jp>

開館時間：10:00-18:00（入館は17:30まで）

主催 朝日会館・会館芸術研究会、東京大学駒場博物館

謝辞

本展覧会開催にあたり、貴重な資料をご出品いただいた皆様、ご協力をいただきました関係者各位に深く感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

資料提供・協力してくださった方々

大阪音楽大学音楽博物館
株式会社朝日新聞大阪本社社史編修センター
株式会社竹中工務店
株式会社シェルマン
公益社団法人大阪フィルハーモニー協会
神戸映画資料館
テレビ朝日映像
東京国立近代美術館フィルムセンター
東京大学駒場図書館
東京大学情報学環図書室
豊田善敬氏
日本近代文学館
肥田皓三氏
明治学院大学付属日本近代音楽館
若林あかね氏
早稲田大学演劇博物館

特別にご協力いただいた方々

伊藤由紀氏（東京大学）
近藤和都氏（東京大学）
芝田江梨氏（大阪市立大学）
永吉洋介氏（映写技師）
松隈章氏（竹中工務店）

朝日会館・会館芸術研究会

問い合わせ：ヘルマン・ゴチェフスキ研究室
(gottschewski@fusehime.c.u-tokyo.ac.jp)

研究会 HP ページ：

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/gottschewski/kaikan>

本展覧会に参加したメンバー：

ヘルマン・ゴチェフスキ（研究代表・東京大学） / 大森雅子（東京大学）
 / 岡野宏（東京大学） / 紙屋牧子（早稲田大学演劇博物館） / 白井史人（東京大学）
 / 高山花子（東京大学） / 長木誠司（東京大学） / 中村仁（桜美林大学）
 / 古館遼（東京大学） / 前島志保（東京大学） / 茂木謙之介（東京大学）
 / 山上揚平（東京藝術大学） / 山本美紀（奈良学園大学）

表紙写真：1951年5月頃の大阪朝日会館写真

Skillman Library, Lafayette College.

<http://digital.lafayette.edu/collections/eastasia/warner-slides-japan/js0019>

あいさつの言葉

2011年の秋、超域文化科学専攻の大学院生と卒業生を中心に何人かの若手研究者が、それ以前の共同研究プロジェクトが終了したため何か新しいことを始めたいと私の研究室にやってきました。超域文化科学専攻（主に比較文学比較文化コースと表象文化論コース）の学際性を活かし、大阪で出版されていた『會館藝術』という雑誌に扱われている全ての分野——各種の舞台芸術、映画、美術、音楽、文学等——にわたる総合的な研究をしたいとのことでした。私の専門は音楽ですが、この雑誌についてのまとまった研究が全くない状況もあり、非常にうれしい提案でした。

その後、朝日會館・會館藝術研究会が立ち上がり、研究資金の獲得のための様々な可能性を図りながら議論を進めた結果、雑誌研究に加えて『會館藝術』を出していた文化施設、すなわち大阪の「朝日會館」とその催し物を研究対象とし、アート・マネジメント、建築、文化政策等も視野に入れることになりました。2013年には研究費（日本学術振興会科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 2013～2014年度）の申請に成功し、そのもとで2年間研究し、その成果を本展覧会および学術シンポジウムとさまざまな関連イベントで発表することになりました。

参加者それぞれの専門領域と関心は幅広く、研究内容を一言でまとめることは難しいですが、何よりもまず、『會館藝術』と「朝日會館」についての情報を収集した上で、データベースを作り、それを研究材料として共有したことが、この研究会の特徴として挙げられます。定期的に研究会を開き、各参加者の発表と全体の進行について議論を進めました。遠方のメンバーもいたので、研究会にはスカイプなども多用しました。

結果的には短い期間で、しかもメンバーの数で割ってみると僅かな援助金で、素晴らしい研究成果を挙げることができたと思います。それは他では稀にしか見られない、本専攻における大学院生の主導力と協力心の賜物です。この類いのプロジェクトでは必然的に起こることですが、非常に多くの課題もまだ残されています。あるいは研究の後で見えてきた新たな課題は最初に見えていた課題よりもさらに多い、と言えるかもしれません。こうした新たな課題は、日本の文化に関わる将来の研究にもさまざまな刺激を与えることになると思います。

最後に、貴重な資料をご出品いただきました博物館、資料館、所蔵家の方々、協力機関各位、そして駒場博物館のスタッフの方々にあつくお礼を申し上げます。ご来訪の皆様がこの展覧会と関連イベントを楽しんでいただければ幸いです。

ヘルマン ゴチェフスキ

研究代表者・東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻 准教授

大阪朝日会館と機関誌『會館藝術』について

私たちの研究会は朝日会館および『會館藝術』の歴史的意義を各芸術分野の専門家によるグループ研究によって明らかにすることを目指しています。本展覧会では朝日会館とその機関誌『會館藝術』を現物資料の展示を交えつつ、紹介することを目的としています。

朝日会館は1926年から62年まで大阪の中之島に存在していた総合文化施設です。朝日新聞社を経営母体とする会館は、内部に展覧会場やホールをそなえ、映画上映、舞踊公演、演劇公演、音楽会、講演会に美術展、さらには雑誌出版など多彩な文化事業を行っていました。川沿いにそびえる地下一階、地上六階の建物は、全体が黒色に覆われていたこともあり、ひときわ目を引くものだったといえます。朝日会館が開館する際におこなわれた談話の中で、当時の大阪市長である関一はこんなふう述べています。いわく「この壮麗で『文化の殿堂』として申分のない建築物は大阪市民の多年熱望していたものです。(中略)その建築様式も異彩を放ち海外に誇るに足るべきものでシヴィック・センターの同所を中心として都市計画の完成とともにその偉観に接することのできるのは私の最も欣幸とするところであります。」(『朝日會館史』より)

この時期、関はみずから掲げる「大大阪」理念のもとに大阪を近代都市へと変貌させようと目論んでいましたが、この談話はそのなかで文化施設としての朝日会館に期待がかけられていたことを示しています。実際に会館はさまざまな文化領域において主導的な役割をはたしました。『會館藝術』は朝日会館が発行していた、いわば会館の機関誌のような位置づけの雑誌です。とはいえ、たんに会館に関わる情報を載せるだけでなく、独自の文化雑誌としての性格を持っていました。たとえば創刊号の特集は舞踊家の伊藤道郎(イトウ・ミチオ)と声楽家のトティ・ダル・モンテです。この特集がくまれた第一の理由は朝日会館において伊藤やダル・モンテじしんの公演が催されたことにあるでしょうが、掲載された記事の中には藤田進一郎が舞踊芸術全般を考察した「ダンス藝術」がふくまれるなど、その広告・紹介にとどまらない編集姿勢が伺われます。『會館藝術』は1931年の創刊いらい幾度かの誌名変更をへて1953年まで出版され、当時の大阪文化を知るうえでも貴重な資料になっています。(文責：岡野宏)

各展示ゾーンの紹介

展示会場は、概論・建築、雑誌、音楽、映画、演劇、音楽、美術の七つにゆるやかに分かれています。以下、各展示ゾーンの概要を紹介します。

【概論・建築】

朝日会館の成り立ちや運営法、建築について解説しています。いわば文化活動の「場」としての会館を紹介するゾーンです。各種印刷物に加えて、会場入り口付近ではこれまで国内では確認されていなかった朝日会館のカラー写真、中央では公演場レリーフのレプリカと朝日新聞社屋の模型、会場奥では朝日会館の写真群の展示を行っています。

【雑誌】

1931年、朝日会館は『會館藝術』という機関誌を創刊しました。さまざまなジャンルの記事が盛り込まれたこの雑誌は、その後、名前や規模を変えながらも、1953年まで継続されました。今回は、創刊から廃刊までの変遷を概観できるよう、年代を大きく5つに区分し、表紙や記事の実物を展示しています。同時代のほかの雑誌と比較すると、厚みやテイストの違いなども見えてくるのではないかと思います。

【音楽】

1958年に大阪フェスティバルホールが生まれるまで、海外からの有名ソリストの演奏会、藤原歌劇団、新交響楽団、宝塚交響楽団の公演が行われるなど、朝日会館は関西音楽界の中心地でした。また様々なアマチュア団体の演奏会、レコード鑑賞会なども開かれています。今回は公演プログラム、パンフレット、チケットを中心に展示しています。また、会館で演奏した音楽家たちの、会館での演奏会に近い時期の録音をいくつか聴くこともできます。

【映画】

1926年の開館以来、朝日会館では、外国映画、日本映画、アニメーション映画、記録映画など、さまざまな作品が上映されました。1930年にトーキー映写機が導入されると、ミュージカル映画も頻繁に上映されました。今回は1920年代から戦後にかけての資料より厳選し、会館の主要な観客動員イベントだった「映画アーベント」のパンフレットや、上映作品のステル写真を中心に展示しています。宣伝映画「朝日は輝く」（1929）や朝日新聞社製作のニュース映画も会場で上映しています。

【演劇】

地元京阪神の劇団だけでなく、東京の劇団も頻繁に朝日会館に来演しました。シェイクスピア、チェーホフ、ゴッリキーの翻訳劇のほか、プロレタリア演劇が数多く上演されました。戦時下の規制にあっても新劇の上演が途切れなかったことから、盛んだった様子がうかがわれます。当時のチラシ、パンフレット、ポスターのほか、左翼劇場関西公演の「暴力団記」舞台装置図もパネルとして展示しています。

【美術】

美術団体の展覧会会場として、朝日会館は1936年に開館した大阪市立美術館に先立つ重要な施設でした。1930年11月に結成された独立美術協会の第1回展の会場のひとつだったのも、朝日会館です。今回は、その独立展にかんする資料を展示しています。雑誌「會館藝術」の表紙絵担当者には、信濃橋洋画研究所出身の画家もおり、大阪を中心に活動する洋画家たちと会館の結びつきが注目されます。

【文学】

雑誌「會館藝術」には、さまざまな文学作品が掲載されました。プロレタリア文学、「コント」、女性作家の寄稿、著名人のエッセイなどによって紙面に読み物としての多様性が与えられていたことを、今回はパネルで紹介しています。井伏鱒二「頬張れの思想」（1932年12月号）、与謝野晶子「夏山抄」（1939年7月号）など全集未収集の作品もあり、ほかの新しい発見を見据えた今後の調査が期待されています。